『真實心』第十四集平成4年度1993年3月発行（京都光華女子大学）

花のいのちとこころ

籠谷　真智子

私どもの京都女子大学とは姉妹の間柄にあります宗門の学校ですので、なんだか初めて伺ったような気がしなくて、親戚の家にお邪魔したような気楽な気持ちでおります。今日こうしてご縁のありましたことは、私にとりましてとてもうれしいことです。つたない話になると思いますが、お気持ちにかなう部分だけでも聞いていただきたいと思います。

二十年ほど前ですが、私のほうの学園の掲示板にこんな歌が貼り出されたことがあります。

捨てられてなお咲く花のあわれさに　またとりあげて水あたえけり

その作者がどのような方であるのかまったく知りませんでした。けれども、花のいのちも人間

のいのちも等しくいのちとして大切に思っていられる方の作品だということで、最初はその掲示板の前を素通りしたのですが、ちょっと待てよと思いまして、もう一度戻って読み返してみたのです。「捨てられてなお咲く花のあわれさに　またとりあげて水あたえけり」、なんとやさしい歌なのだろう。おそらく女性の作品に違いなかろうと思ったわけですが、はたしてこの歌は九条武子という方の作品だったのです。ここには人を教化するとかといった教訓めいた内容もございません。ただ何かしら忘れがたい歌だなあということで、そこから私は九条武子さんについての勉強を始めたわけなのです。

武子さんという方は明治二十年(一八八七)のお生れです。お生れは西本願寺の御門主家である大谷家でありまして、お父さまは明如という御門主で、その次女としてお生れになりました。二十三歳のときにご結婚されるのですが、その結婚は一般世間からみても決して幸せなものではありませんでした。新婚生活の甘いときに、なっとくづくの、ちゃんと理解した上ではありましたが、半年ほどで別居するという状態になったのです。

今は国際的に東南アジアの文化の発掘ということが注目されておりますが、明治の四十二、三年と申しますと、明治の三十五、六年から始まったシルクロードの探険が盛んであった時代

『真實心』第十四集平成4年度1993年3月発行（京都光華女子大学）

で、これには世界的に有名な考古学者たちが集まって探険をしていました。イギリスとか、ドイツとかといった国々の学者たちが探険に乗り出していたのですが、そこに日本では私費で西本願寺の大谷光瑞という方が参加されたのです。参加といいましても、独自に探険を始められたわけです。いまでもその発掘された文化財は、非常に貴重な文化財として日本でも評価され、世界的にも評価を受けているわけですが、その発掘をされたときの費用が私費であったものですから、ついに負債を出してしまわれます。そのために大谷光瑞さんは責任をとられるということになったのですが、武子さんは、その責任問題が出てくる前に結婚され、そして別居されたのです。

その別居というのは、ご主人がイギリスに留学され、学者として成長したいと思われ、また、それをお兄さんの光瑞さんも望んでおられて、当時、西本願寺に留学制度というものがございましたので、その制度に乗せて別居という形でイギリスのケンブリッジで学ばれるということになったことによるものでした。ところが、留学であり、せめて二年か三年という話であったのが、十年にもわたって別居ということになりました。武子さんは、その間にいろんな誤解を受けたり、非常な世間のそしりというものも受けられたのです。その一方では西本願寺の仏教

婦人会の本部長として、日本全国、ほとんど毎日のように巡教の旅をなさっています。その間にだんだんと婦人会の近代化ということも実りがあるわけですが、そういう苦しいなかで武子さんは、歌を作るということも真剣になさっていたわけです。ところが、その歌を非常に蔑む人たちが一部にいたわけです。とくに近代の女性解放の運動をすすめていた人たちの間で、「あんなお嬢さま芸の歌なんか、よくも恥ずかしくもなく歌うものだ」と酷評されたのです。そういうときに武子さんは、非常に落ち込まれるわけですが、人間落ち込んだときに、その人の強さというものがわかるのは、その逆境のなかから、また挫折のなかからどうして這いあがっていくかということがポイントではないかと思いますが、武子さんは、苦しいときには御堂にいかれ、阿弥陀さまにむかわれて、そして自分の思いのたけを阿弥陀さまに告白されたのです。そのようなときの歌に、

　雨がふる　涙のような雨がふる　仏や今宵はやく出でまし

と歌っておられます。ご自身の心のなかに阿弥陀さまをお迎えになるわけですが、なかなか自分の気持ちが釈然としない、納まらない、そしてだれに何をいわれた、だれが自分を傷つけたといふうな被害者意識ばかりがつのって、一向に心の整理ができない。そういうときにふと思

『真實心』第十四集平成4年度1993年3月発行（京都光華女子大学）

い出されるのが、親鸞さまが世間からも周囲からもたいへんな冷たい仕打ちをお受けになったとき、そういうときには決してあせってはならんとおっしゃったみ教えであったのです。そして、

いくそたび人の心の打擲を　いきどおりなくうけてたまいし

と歌っておられます。親鸞さまは公の権力から弾圧をお受けになっても、お師匠さまの法然先生といっしょに、それに耐えて耐えて耐えぬいて、決して抵抗なされず、しかも、打つ人の心になれということをお諭しになっています。そういうことも武子さんの日記のなかに出てくるのですが、どれだけ加害者からの仕打ちがあっても、じっとそれを耐えて、そして理解をすることだとおっしゃっているわけです。そして、わだかまりというものは早く捨てなければいけない、それもまた親鸞さまに学ばれていることですけれども、どういうふうにしたら自分の心の悩みを捨てることができるかということも、いろいろにお考えになって、こういう歌も作っておられます。

水のごとほまれそしりも流れされば　きのうの人になにごともなし

自分に悪口をいった人、自分に害を加えた人、そういうことも全部忘れてしまいなさい、これ

はご自身が一生懸命努力されたことだっだのだろうと思います。こういうふうに、歌と武子さんの人生というのは、夫との別居状態のなかでも比較的淡々として、歌読みの人としても作品をたくさん遺していかれました。

彼女の生涯でいちばんショッキングな事は、大正十二年の九月一日に東京一帯に大地震があったことです。しかも、それはちょうど昼ご飯時でありました。当時は東京にも都市ガスというものは十分普及はしていませんでしたので、おくどさんとか、かんてきに火をおこして食事の支度をしていました。それが一瞬の家屋の倒壊によってたいへんな火災を起こしたのです。火は風を呼びますので、火災の起きた場所というところは、非常に風が回りまして、風の方向がくるくる変わるものですから、逃げようがないわけです。しかも、大集団になって逃げるものですから、うっかりすると袋小路のなかに入ったりして、数百人が焼け死なれたということもあったのです。

当時、武子さんも東京の築地の本願寺の近くにお住まいだったのですが、とても家のなかにおれなくて、庭に出て大きな木にしっかりとつかまっていましたとおっしゃっています。東京の本願寺の本堂もつぶれてしまい、延焼により焼けてしまいました。その時に、数人のお婆さ

『真實心』第十四集平成4年度1993年3月発行（京都光華女子大学）

んは、どうせ自分たちの命が助からないのであれば阿弥陀さまのもとで往生したいという願いから、覚悟のお堂参りをされていたのです。倒壊したお堂の後片付のおりに、お念珠をしっかりと握られたお婆さま方のご遺体が数体出てきたのです。武子さんはそういう話を聞かれているわけです。では武子さんは震災のただなかでどうしていらっしゃったのかと申しますと、できるだけの荷物を人力車に乗せ、もう一台にはお手伝いさんのお婆さんを乗せられて、二台の人力車で青山にありました別邸へ逃げられたのです。しかし、その間でも、何回か炎の手が逆流して襲い、その度に道を変えて逃げのびられました。周囲には半死半生の火傷をした人たちを大八車に乗せて、「しっかりしろ」と激励しながら通り去っていきます。非常に足早に車が行くけれども、「あの助かりそうもない大火傷の方はどこへ行かれるのだろうか」と案じられ、本当にこの世のこととは思えないというふうにおっしゃっています。この震災によって武子さんも、それまでに作られた七百首ほどの短歌を焼いてしまわれました。

震災の時に武子さんの気持ちにいちばん強く印象に残ったものは何であったかといいますと、やはり親鸞さまのご苦労と、親鸞さまのみ教えだったということを、後でおっしゃっています。それはいろんなところで震災後の武子さんの生活のなかにあらわれてまいります。例えば、土

蔵も焼けたのだそうですけれども、外から見た土蔵は少しも焼け崩れているようには見えなくて、土壁の色だけがやや焦げているように見えるだけだったそうです。それで土蔵に入られて、大事にしておられたダイヤの指輪をいちばんにご覧になったのだそうです。ダイヤは宝石のなかではいちばん固くて強いとされています。ところが高熱を加えますと、もろもろになって、砂のようになるのだそうです。大きないわれのあるダイヤの指輪でした。箱は焼け焦げていましたけれども、指輪は残っていたというので、うれしいと思われて、リングのほうをそうっとつかんで取り上げられると、玉のほうはもろもろになって指の間からこぼれてしまったのです。そのようなところから、人間が大事にしているもの、しかも自分の生活のなかで命から二番目に大事にしているものと思っていたダイヤでさえ、あつい熱を加えると砂のように崩れてしまうのです。これではいったい人の命も、そして人の心を豊かにしてくれる宝石さえも常にあるわけでは無いという疑いをお持ちになったのです。そして、この迷いを自分の心のなかでどういうふうに整理していったらいいのかということをお考えになった結果、『歎異抄』の言葉を思い出されたそうです。それは、

煩悩具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、ま

『真實心』第十四集平成4年度1993年3月発行（京都光華女子大学）

ことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします。

という言葉でした。これは親鸞さまの教えをお弟子の唯円さんがそのまま聞き書きとしてお書きになった文ですが、たしかに人間世界の物質的なものというものは、そしてまた、人間の作り出した心の動きというものは非常にたわいないものであるということを、この『歎異抄』の文から武子さんは学ばれたわけです。

そういうことがありまして、震災後から、武子さんは社会に対して目を向けていかれました。震災後、たくさんの震災孤児ができ、赤ちゃんや幼い子たちが両親を失って、孤児院に預けられるのですが、そこでもなかなか施設としての十分なことがしていただけないという状況でした。家もバラックのようなものしか建てられないという時期に、武子さんは六華園という、少女ばかりを収容する寮をお造りになったのです。六華園という名は、六字の名号にちなんだ花園ということですが、お父さまの明如さまが六華という雅号を用いておられたことにちなんだ名でもありました。少女たちの生活は、一つには軽い作業というものも生活のためにしているのですが、あとはお花を活けたり、茶の湯を習ったり、編み物をしたりというふうでありました。その材料などは京都から送られて、せっせと少女たちの教養生活というものをすすめて

いらっしゃったということです。

しかし、それだけでは足りない、もっと多くの人に、もっと悲しんでいる人たちのために役に立ちたいと思われました。そこで、何をなさったかと申しますと、女性ばかりの刑務所がございますが、その刑務所から出てきた方々の社会復帰のための寮を造られたのです。関東のほうでは、今でも栃木県に大きな女囚の刑務所がありますが、実は私もそこへ行ってまいりました。刑務所の中へ入ることは何回もないことだと思いまして、随分と気構えて、たいへん緊張してまいったのですが、幸いに所長さんが女性の方でありました。私は何のために刑務所へまいるのかということをご理解いただくために、向こうへまいりますまでに、手紙を所長さん宛てに出してお願いしておいたのです。そのときに、武子さんのお手紙の写しを入れておきました。武子さんのお手紙というのは、この刑務所で武子さんがお話をされたときのお気持ちをお友達に伝えられたものなのです。

武子さんは、刑務所から出てきた方々のために、両全会という、今で申しますと、社会復帰のためのリハビリの寮をつくられているのです。半年も一年も刑務所の生活をしておりますと、刑務所人間になってしまって、出てまいりましても、すぐに社会人としての活動ができないわ

『真實心』第十四集平成4年度1993年3月発行（京都光華女子大学）

けです。例えば、長い間、五年も十年も服役していた人は、お金の値打ちさえさっぱりわからなくなります。ですから、所内で軽作業をして貯えた御小遣いがありましても、それの使い途がわからず、一度に使ってしまったりすることがあるものですから、社会に順応できるようにということで、社会復帰のためのリハビリの寮をつくられたわけなのです。その寮をおつくりになるために、武子さんは、その栃木県の刑務所に見学にいらっしゃり、女囚の方々を前にしてお話をなさっています。私はあからさまに女囚の刑務所などと申しておりますが、武子さんは非常に優しい方で、相手の立場に立って深い気遣いをされる方でありましたので、一言も刑務所という言葉が出てこないのです。「心の病院」というふうに表現されています。ですから、「心の病院へ行ってまいりました。そしてお話をしてまいりました」とお友達へのお手紙にも書いておられるのです。そのお手紙の写しを所長さんに差し上げて、見学のお許しを願ったわけです。

門を入りますと、何だか記憶にある建物でした。考えてみましたら、数年前に見た、日本舞踊家の幻舟さんのドラマにあった建物だったのです。セットであったのかもわかりませんが、セットであるとしたら良くできていたと思うぐらい、玄関だとか、なかの部屋の具合だとかが

よく似ていました。それまでに武子さんのお手紙を読んでくださっていた所長さんは、「非常に短いお手紙だけれど、武子さんという方のお気持ちがよくわかりました。決して興味半分でいらっしたわけではなく、あなたも武子さんのことを勉強したいということでお越しになったのですから、武子さんのお手紙に免じて中を見ていただきましょう」といってくださいました。たいへん感謝しました。「作家の方とか報道関係の方だったら絶対お断わりするのですが」ともおっしゃいました。

教務の先生にご案内いただいて、最初の作業室に入りました。刑務所のドアというのはすごく分厚いのです。厚さが四十センチぐらいあるでしょうか。それに教務の先生の持っておられる鍵というのが、各作業室のが全部まとめてあるものですから、ジャラジャラと音がしまして、その音がとてもこわいのです。私は中に入る前に、まずその鍵の音に恐怖を感じました。そして、鍵を開けてドアを引かれるのですが、その軋む音がまたこわいのです。何かたいへんな所へ来てしまったという感じがしたのですが、また一方には、どんな方々にお出会いできるのかという好奇心もありました。

部屋へ入りますと、みな同じユニホームで、木綿のキャップを被って、木綿の上下の作業服

『真實心』第十四集平成4年度1993年3月発行（京都光華女子大学）

を着た三十五、六人の女囚の方がおられました。その人たちが一斉に起立して、「こんにちは－」と、とても明るい声で挨拶してくださいました。刑務所の中にいる同性たちは、おそらく一日中反省と懺悔でうつむいて、暗い気持ちで、こつこつと軽作業に従事していらっしゃるのかと思っていましたので、私はびっくりしてしまいました。最初に入った所はバッグの縫裁をしておられました。みなその手を止めて、明るい笑顔で挨拶してくださったのです。私は虚を突かれまして、あとから考えて、とっても恥ずかしいことをしたと思ったのですが、もじもじとしながら目礼だけはしたわけです。とっさに挨拶が返せませんでした。ふと、その中に金髪の女性が三、四人おられるのに気がつきました。日本の女性とは身長も違いますからすぐにわかりました。その人たちもにこにこして、何か挨拶がしたそうな感じでこちらを向いてくださいました。とにかくその部屋をひとわたり見せていただいたわけですが、私語をする時間はございませんので、ただお顔を見るだけでしたけれども、金髪の外国人と思われるグループを印象強く感じました。とても若く、皆さんと同じぐらいの年齢できれいな女性たちでした。その印象も強かったのですが、もう一つは、制帽のキャップの間から、お年寄りで真っ白な乱れた髪をたらしたお婆さんが一人おられたことです。少し腰も曲がりかけておられ方で、どうなさっ

たのだろうかと思って、とても気掛かりになりました。私の目とそのお婆さんの目とが合いますと、お婆さんは黙ってうつむいてしまわれました。私は声をかけてもいけないと思いまして、その部屋から、その二つの印象をもって出たわけですが、今度は私のほうから、お返しのご挨拶をしなければいけないと思いまして、「ありがとうございました」と大きい声で申しました。そうしますと、「さようなら」とおっしゃってくださったのです。

私は、その第一室で心なごむ思いをいたしまして、ふと武子さんが、「あなた方は、決して自分を卑下してはいけませんよ」というお話をされたことを思い出しました。こういうことをおっしゃっております。

世間に敗れた人間というものは多いものです。ただしかし、与えられた自分のいのちを、そう軽々しく蔑んではいけません。自分のいのちというものを自分で可愛がっておやりなさい。そして、たまたま運の悪い人生に出会った自分というものをもっといとおしみなさい。懺悔も大切、反省も大切ですけれども、必要以上に自分をいじめないでください。それよりは明日の自分に向かって、もっと強い私をつくりなさい。その強い私というものをつくるには、心の中に一つ頼れるものを持ちなさい。その頼れるものというのは、私の場

『真實心』第十四集平成4年度1993年3月発行（京都光華女子大学）

合は信仰です。

こういうお話であったのです。女囚さんのほうからはそれぞれに、罪を犯された時のお話もされたらしいのですが、すすり泣きの声が漏れはじめますと、皆が武子さんの話の真実（まこと）に触れた感激で涙を流していたと、お友達へのお手紙に書いておられます。私は武子さんのように真実のこもった話ができません。だから、どんなに皆さんにおしゃべりされても当然だろうと思いますけれども、武子さんの場合は本当に真実の叫びがあるお話をされたわけですね。

第一室を出まして第二室にまいりました。今度は赤ちゃんのいるお母さんがいらっしゃったわけです。この方の場合も、側において作業していらっしゃるわけではないのですが、授乳の時間になると、監視つきで作業室をお出になるのだそうです。この方は第三番目に印象の深い方でした。全部の作業室、それから個室も見せていただきました。いわゆる独房というところです。それから礼拝堂も見せていただきました。礼拝堂が二箇所あるのです。一つはキリスト教の教会風な礼拝堂で、もう一つはまさしく仏教の礼拝堂でありました。私は軽率な人間なものですから、この礼拝堂はそれぞれの信仰されている方々が定期的にお参りになるとか、懺悔をなさるとか、私的にお使いになるのだろうと思いまして、おたずねしましたら、要望があれ

ば私的にも礼拝できる場所でもあるが、とりわけ加害者として入所しておられる方が被害者のために祈る場所なんですと、教務の先生が申されました。なるほどと思いました。加害者として被害者の方の苦しみや悲しみを、なんとかして自分の心のなかで反省し、そしてまた、気持ちの上での被害者への思いというものを、毎日のように祈りを通じて、仏教の場合でしたら阿弥陀さまを通じて相手に伝えたいということであったのです。それをお聞きしまして、この目に見えない心の祈りというものが、どれほど女囚の方々の生活の上で大切なことなのか、そしてまた、心のリフレッシュをされる場合に、命のリフレッシュをされる場合に、どれほど大事なことかということをつくづく感じました。刑務所のなかに教会があり、仏堂がありということで、私は人間としての命と心の在り方の原点を見せていただいたような気がいたしました。

皆さんは非常に生き生きとした命、そしてご両親、ご先祖からいただいたたいへん得難い命をそれぞれお持ちです。ですけれども、いま自分が非常に大事な命を得ているということを、一日に一回でもお考えになったことがあるでしょうか。私は武子さんの勉強をふまえながら、決して命の花の時代というのは若い時のことだけではなくて、一生涯の命が一つの花だというふうに考えるようになりました。ですから、人間どのような境遇のなかにあっても、自分の命、

『真實心』第十四集平成4年度1993年3月発行（京都光華女子大学）

自分の心というものは、常に反省をしながら、そして武子さんが教えられたように、何か心の支えになるもの、そして自分をできるだけシャープに、きれいに、澄み切った気持ちのなかで、加害的な自分の行為を自覚しながら生きていくことが大事なのではないかと思うのです。ともすれば、人間というものの被害者意識というのは根深く潜伏する傾向があると思うのです。いつまでも相手のいったことを思い出していたり、それに抵抗して恨み返してやるとか、今度こそやっけてやるみたいな自力の思いというものが心をよぎるのが普通ではないかと思います。私もそうであります。なかなか思い切れません。執念深いのです。これではいけないと思いますね。いつまでたっても人間として成長しない、心の成長がないということは、心の開花期がないのといっしょだと思うのです。花のない人生、これほど寂しく、みすぼらしいものはないのではないかと思います。人間の心の開花期というのは、決してものに恵まれたり、経済的に恵まれたりしたものからは生まれてこないのではないかと思うのです。

こうして幸いに、皆さんも私も宗門校で勉強するという環境にいます。いま、この疲れ切っている環境のなかで、まず自分のいのちを、つぼみかもしれない自分のいのちを燃やしていくこと、「いのちの花」を咲かせていくこと、これを信仰の上でまともに考えてみてはどうかと

思うのです。人生の方程式というものはないと思います。いろんな人がいろんな生き方をして、そしてそれなりに、それぞれの生き方の真実を見つけだしていくものだろうと思います。私などは中途半端で、いのち絶えるときまで人生の真実というものが見つからないかもわかりません。でも、努力はしようと思うのです。ただ、武子さんを学んでおりますと、自分のいのちというものの尊さ、ありがたさというものがわかったならば、それへの報謝を考えなさいと教えられます。ご恩をいただいて、生かされているということに気づいたならば、生かしていただいているみ仏さまに対して感謝を忘れてはいけませんと教えておられます。まさしくそうだと思います。その感謝は何も仏さまだけに向かってするだけではないでしょう。日々、あなた方が登校される前には、いまだに据え膳でお母さまに朝食を作っていただいている方があるのではないでしょうか。学校へ持ってくるお弁当を作ってくださるお母さまがあるかもわかりません。そういったものも当たり前みたいにして召し上がっているのではないかと思うのです。まだ当たり前ならいいですが、今日のおかずはどうだとか、起きたばかりでは食べられないとか、不服ばかりが先に立っているような一日の始まりであり、朝の食膳に向かうときの気持ちではないかと思うのです。そういうことに対しても武子さんは、自分の生活、心の基準というもの

『真實心』第十四集平成4年度1993年3月発行（京都光華女子大学）

を、み仏につなげていって、そうした心自身もみ仏さまからいただいたのだというふうに考えられ、私の心は私の心であって実は仏さまの心なんだというふうなことも日記に書いていらっしゃるわけです。そういうふうに、仏さまといつも差向いで、悲しいときだけではなく、嬉しいときも、仏さまと常に心の対話をされているのです。それが九条武子という人の人生の花を咲かせるエネルギー源になっていると私は見ています。

そういうなかで反省をされた歌もございます。

大いなるものの力にひかれいく　わが足跡のおぼつかなしや

「おおいなるものの力にひかれいく」、仏さまの力、ぐんぐんひっぱってくださる仏さまの力ですね。仏さまのお声、仏さまのお姿というものが、武子さんの心の中に住みついておられるのです。そして自分は相当信仰深いと思っているけれども「わが足跡のおぼつかなしや」とおっしゃっているのは、人間の信仰というものはたわいないものだなあということです。何度自分で説得して、何回心の中で整理したつもりでも、またぞろ凡夫の悲しみか、他人を恨んだり、他人に対する恨みを申すのです。

そういうなかで、武子さんはこころといのちのリフレッシュの手段として「合掌ということ

をしてごらんなさい」、それも「こころの合掌をしてごらんなさい」ということをおっしゃっています。こころの合掌というのは、自分を無にして、ひたすらみ仏に生かされている私であることの自覚であります。それにまた、み仏にいただいているいのちとこころ、それをエネルギーにして自分の人生の花を咲かせることを心がけ、こころの中で、嬉しいときも悲しいときも常に合掌してごらんなさいといわれるのです。形の上では合掌というのは何か若い皆さんには抵抗があるかもわかりません。しかし、これは理屈ではありません。とにかく合掌の姿勢というのは、思いがけず心の中にみ仏を誘い込むマジックがあると私は思うのです。武子さんは「こころの合掌」という詩を書いていらっしゃいます。

見えねどそのみ姿
聞こえねどそのみ声
さあれ　我のみぞ知る
不断の誓い　不滅の光
ひざまづきてもろ手を合わせ
疑わじこの喜び

『真實心』第十四集平成4年度1993年3月発行（京都光華女子大学）

うけますやわがこころの合掌

「仏さまのお姿は見えません。お声も聞こえません。だけど、お姿は見えず、お声は聞こえなくとも、私には心眼を通して仏さまが見えるのです。私には心耳を通して仏さまのみ声が聞こえるのです。そこまで合掌してごらんなさい。そのように合掌して祈る自分の心の中に、隙間風の吹くような冷たい気持ちというものはないはずですよ、喜びがわいてくるはずです」とおっしゃっているのです。この詩の最後のところに、「うけますや　わがこころの合掌」とあります。仏さまに向かって、自分は一生懸命お祈りをして、仏さまの姿も幻想のなかで見えるし、仏さまのみ声も幻聴のなかで聞くことができる、そこまで一生懸命お祈りを深めてきたけれども、「やはりまだだめね」というのがこの詩の九割ですね。そして、最後の一割のところで、だけどまだまだお祈りをしますから、私のこころの合掌を受けていただけますかといっておられるのです。この詩に、白鳥先生という方が曲をつけてくださっております。昭和の初めでありますけれども、とてもいい曲ですので、お聞きいただきたいと思います。

このようにして、九条武子という人は、自分の生涯を念仏の人として努力され、昭和三年二月の七日に亡くなられるわけですが、その最後の最後まで、あそか病院という病院の設立運動

に奔走され、真っ白なエプロンをかけて働かれました。昭和になってもまだ震災の社会的後遺症として、身寄りがなく、病気になってどうしても病院での生活をしなくては生きられないという人がたくさんいらっしゃったわけです。震災による死者だけでも九万一千三百四十人からになるといわれており、当時、場所によっては累々と死体が積み上げられ、暑い時期ですので異臭が放たれてたのですが、一月ぐらいはその整理もおぼつかなかったといわれております。とくに悲惨だったのは病人の方でした。あそか病院は最初は本願寺診療所といって、バラックのような建物だったのですが、そのような病人をたくさん収容されたのです。そして武子さんも最後まで看護の手伝いをされました。

武子さんが亡くなられる前日のことですが、非常な高熱にうなされてうわごとをいわれたらしいのです。診療所には小児科の先生を中心にした診療室もありまして、そこには母を亡くした乳飲み子たちもたくさん収容されていました。武子さんは、傷の苦しさ、病気の苦しさから泣き喚く赤ちゃんをあやしたり、先生の診察の手助けをしたりしておられたのです。それが、もういくばくもなく命が果てるといわれるときに、うわごとで小児科の先生を呼ばれたのだそうです。福井先生とおっしゃる先生ですが、「福井先生、福井先生、赤ちゃんが泣いてますよ」

『真實心』第十四集平成4年度1993年3月発行（京都光華女子大学）

いわれたというのです。これは話にすれば何の変哲もないうわごとかということになりますが、武子さんのこういった福祉に対する思いというもののあらわれだと思います。そして、その福祉に対する思いは、あの方の人生の花の一ひらであったのではないかと私は思っております。

九条武子さんの本を出しましてからもう数年たつのですが、つい最近になって、その福井先生のお嬢さんという方が突然尋ねてきてくださったのです。びっくりしました。お嬢さんと申しても随分お年の方なのですが、シスターでいらっしゃいました。いまは白百合学園の教授をしておられるのですが、「私の信仰はキリスト教ですけれども、父が武子さんを通して浄土真宗にたいへん思い入れの深かったことだけは、いまだにいい思い出になっております。宗旨は違いますけれども、祈る心というものは違っておりません」と申しておられました。私は武子さんのいのちとこころの花の実が、広く飛び散っていって、そこでまた温かな浄土真宗の信仰の芽をふきだしてきているということを、福井先生とお話しながら感じました。福井先生は、シスターのスタイルをしておられるわけですから、最初は違和感をもちましたが、だんだんお話していますと、心が一つに溶け合ってくることを感じまして、その日は本当に幸せな日だったと感謝して合掌したことでした。

雑駁な話で、まとまりがなく、なんだか時間だけがたったような気がいたします。本当にご静聴ありがとうございました。

――一九九二・一〇・二九――